



第2回

モーツァルト交響曲 全曲演奏会

2008年8月10日(日)

◆ 開演 ◆ 14:30 ◆

会場：才能教育会館ホール

主催：モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会

共催：長野県松本深志高等学校音楽部志音会・松本室内合奏団・松本交響楽団・安曇野シンフォニー楽友会・松本あつみの音楽祭

後援：松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・(社)才能教育研究会

信濃毎日新聞社・SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・(財)八十二文化財団

よこしまかつと

シンフォニー・デビュー

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテは、特に晩年になってから非常にモーツァルトに興味を持っていたことを、ヨハン・ペーター・エッカーマンとの「対話」が教えてくれる。ゲーテは、天才モーツァルトこそが彼の『ファウスト』にふさわしい音楽を書くことができたと考えていた。「その音楽は、『ドン・ジョヴァンニ』の性格であるべきであり、モーツァルトは『ファウスト』を作曲すべきだった」(1829年2月12日)。彼はモーツァルトを、天国的な気分のゆえにラファエロやシェイクスピアに匹敵すると評価していた。(この比較は後代に踏襲された)。ゲーテにとってモーツァルトの例は、天才的なものの特徴付けともなっている。「なぜなら、天才というものは、神と自然の前に自らを示すことができ、それゆえに帰結をもち、長続きするような営みを生じさせるような創造的な力とは異なったものだからである。モーツァルトの全作品はこのようなものである。それらの中にはある種の創造的な力があり、それは世代から世代へと生き続け、汲み尽くされ、食べ尽くされることもないであろう」(1823年3月11日)。細かい点では、エッカーマンによって操作され、美化された表現における言葉の信憑性を疑うこともできようが、ゲーテがモーツァルトを高く評価していたことは、ヴァイマルの劇場におけるモーツァルト・オペラの上演数や、彼が『魔笛』の続編を書いたことからわかる。詩人ゲーテは、シカネーダーの台本を理念的に高め、詩的な価値を上げることを思いついたのであった。

法律家兼自然科学者であったデインズ・バリントンがイギリス学士院にあてた一通の報告書の中で彼はロンドンにいる八歳のモーツァルトをこう紹介している。

私は彼に手書きの二重唱を持ってゆきました。これはメタスタージョのオペラ『デモフォオンテ』のなかのお気に入りの歌詞に、さる英国紳士が曲をつけたものでした。楽譜全体は五声部、つまり第一および第二ヴァイオリンの伴奏、歌唱声部が二つ、それにバスからなっていました。ここで同様に触れておきたいのは、第一および第二の歌唱声部は、イタリア人たちが【コントラルト記号】と呼んでいるもので書かれていたことであります。この点をとくに注意した理由はのちに明らかとなりましょう。この手書きの作品を携えていった意図は、この曲を彼が以前に見たことなど絶対にありえないので、初見で弾く場合の彼の能力の否定しがたい証拠を得ることでした。楽譜が彼の譜面台の前に置かれるや、彼はすぐにまったく堂々とした仕方でも器楽の部分を奏しはじめましたが、テンポも演奏の流儀も作曲家の意図にふさわしいものでありました。私がこうした事情をお話ししているのは、もっとも偉大な巨匠ですら、最初の試みでは、こうした点で往々失敗するものだからです。器楽の部分が終わると、彼は上のほうのパートを取り、下の声部は父親にわたしました。彼の声はその調ではか細く、子供っぽいものでしたが、その歌いぶりはまことに見事で、なにものも凌駕(りょうが)しえないものでした。この二重唱で低いほうの声部を受け持った父親は、そのパッセージが上の声部のそれよりむずかしいわけではないのに、一、二度ははずしました。そのとき、息子のほうはいささかいらだたしげに振り返って、父親に誤りを指摘し、訂正してやったものです。しかしながら、彼は自分のパートを真正この上ない趣味でもって、きわめて正確に歌って、二重唱の真価を完全に発揮したばかりでなく、また二つのヴァイオリンの伴奏がいちばん必要とされるとこ伴奏もおこない、最良の効果を生み出したものでした。

幼いモーツァルトの様々な事実を目撃したバリントンは、この報告書の中でこんなエピソードも書き加えている。

私は、彼の父親が少年のほんとうの年齢については嘘をついているものと疑わざるをえませんでした。それでも彼はたいへん子供っぽい様子をしていたばかりでなく、同様に挙動のすべてがこの生涯の時期にふさわしいものでありました。たとえば彼が私のために演奏してくれていた最中に、お気に入りの猫が入ってくると、彼はすぐにハーブシコードを離れてしまいまして、長い間私どもは彼を連れ戻すことができませんでした。

1765年2月6日からロンドンの新聞には「自然の驚異たる、十二歳のモーツァルト嬢ならびに八歳のモーツァルト氏」の慈善興行としての「声楽と器楽コンサート」を謳った予告があらわれる。しかしヴォルフガングのシンフォニー・デビューとなるはずのコンサートは、同年2月18日の月曜日まで延期となった。またなんらかの知られざる理由から、2回目の上演も延期になった。ロンドンの新聞に再び予告の記事があらわれるのは、2月15日になってからである。

ハイマーケット 小劇場

モーツァルト姉弟によるコンサートが来る二十一日、木曜日に、間違いなく行なわれるはずである。開始時間は、きっかり六時。同晩他の会合に出席する貴族および紳士にも支障のない時間である。……略……十五日用に交付されたチケットは有効。

コンサート後日の新聞は次のような簡単な報告だけが載った。「八歳のドイツの少年、ヴォルフガング・モーツァルトなる人物が到着した。彼は様々な種類の楽器を、合奏あるいは独奏で演奏することができる。また作曲の腕前も驚くべきもので、その年齢にしてはひとつの驚異だとみなされている。」

数週間後レーオポルトはザルツブルグに住む友人であり、パトロンおよび家主でもあったローレンツ・ハーゲナウアーにヴォルフガングのシンフォニー・デビューの様子を手紙で伝えた。……先月の十五日に催そうと思っていた私のコンサートは二十一日にやっとなされました。楽しい催しが(いやになるほど)ある時期なので望んでいたほどではありませんが、それでも130ギニーにはなりました。ただそのための経費が27ギニーを越してしまい、今では100ギニーそこそこしか残っていません。……

1765年2月21日とそのあとに行なわれた3月11日のコンサートでヴォルフガングのどのシンフォニーが演奏されたかいまだに謎である。

多くの資料やナンネルが「最初のシンフォニー」と呼ぶ失われた作品などを検討していくと、結局、現存する作品の中で、ロンドンのコンサートで演奏された候補としてあげられるのは、たった3曲と考えられる。

それはKV16(第1回全曲演奏会で演奏) KV19a(第3回全曲演奏会で演奏予定)そして今回演奏するKV19である。

PROGRAM NOTE

- 交響曲 第4番 二長調 Sinfonie in D dur KV19
(9歳 1765年か1766年 ロンドンか デン・ハーグで作曲)
Allegro, Andante, Presto

モーツァルト一家は1765年7月24日、ロンドンを出発、パリを目指す。しかしロンドンのオランダ大使からデン・ハーグに行くよう説得させられる。

理由はヴォルフガングに会いたい貴族がいたことによるのだが、結局一家は翌年1766年1月26日までデン・ハーグに滞在することになる。

ロンドンか デン・ハーグか？

KV19のオリジナル・パート譜セットを束ねていた包み紙が現存している。そこには次のような書き込みがある。「シンフォニア/ヴァイオリン2/オーボエ2/ホルン2/ヴィオラ/と/バスのため/へ長調(そこへ上書きして)ハ長調(鉛筆で消してその横に付け足して)二長調」レオポルトによる書き込みは我々にKV19のために使用される以前、へ長調の作品と次いでハ長調の作品に使用されていたことを示している。包み紙の裏にレオポルトはKV19aの第一ヴァイオリン・パート15小節分を筆写している。ただし、KV19のパート譜に使用した用紙はオランダ産であり、包み紙(フランス産)に書き込まれた調性の順序「へ帳調=KV19a ハ長調=KV19b(現時点では見つかっていない) 二長調=KV19」はモーツァルト一家のオランダ滞在中に書かれた可能性もでてくる。現在この交響曲の分析が進むにつれ、当時オランダで活躍していた作曲家たちとの作風が似ている点からもデン・ハーグで作られた可能性が高いと考えられてきている。

当時のオーケストラ

これらの演奏会のためのオーケストラがどのようにして集められたかは分からないが、考察の鍵は、いくつかある。可能性として考えられるのは、レオポルトが知己をたどって音楽仲間に声をかけ、「楽団 Band」を作ったことである。しかしそれ以上にありそうなのは、彼が既存の劇場オーケストラを雇ったことである。モーツァルト一家がロンドンに滞在した前後の数シーズンのロンドンのオーケストラに関する統計資料が残っている。ある資料は21人の奏者、一方他の資料では19人+チェンバロ奏者となっている。ただしどちらの場合もその編成まではわからない。ただ当時どんなバランスが好まれていたかはおおよその目安ならばやや後の時期に属する若干のオーケストラ勤務名簿から得られる。その記録からモーツァルト一家のコンサートのための演奏家の数はおおよそ18名ほどであったと想像される。ヴァイオリン8人、ヴィオラ3人~1人、チェロ2人~1人、コントラバス1人、ファゴット1人、ホルンとオーボエは1組ずつ、だったのではないだろうか。

(今回の松本モーツァルト・オーケストラはこの編成を参考にしています。)

そして想像していただきたいのは若干9歳のモーツァルトが指揮者としてそのグループの前に立ち、自分のシンフォニーを鍵盤楽器を弾きながら指揮していたのを。

- 交響曲 第17番 ト長調 Sinfonie in Gdur KV129
(16歳 1772年5月 ザルツブルグで作曲)
Allegro、Andante、Allegro
- 交響曲 第20番 ニ長調 Sinfonie in Ddur KV133
(16歳 1772年7月 ザルツブルグで作曲)
Allegro、Andante、Menuetto、※Allegro

この二つの交響曲を作曲した1772年はザルツブルグでは大きな出来事があった。それはモーツァルトがザルツブルグと決別を強られる直接の原因となるコロレド大司教のザルツブルグ就任の年であった。モーツァルトはそれまで無給のコンツェルトマイスターだった。8月に控えていた第3次イタリア旅行。そのせいもあっただろうが、この年は精力的な作曲活動がみられる。

劇場用セレナータ、ピアノソナタ、教会ソナタ、有名な連作ディベルティメント、いくつかの歌曲、交響曲にいたってはKV129、KV133を含め7曲と非常に多い。こうした音楽活動とも関係づけられるものであろうか、8月21日付けで宮廷の訓令があり、実質的な給与を伴う有給のコンツェルトマイスターに昇格するのである。この事はイタリアに向かうモーツァルト父子にとって大きな自信になったに違いない。

※モーツァルトは珍しく、KV133の4楽章の速度表示は書いていない。

- ピアノ協奏曲 第5番 ニ長調 Konzert in Ddur für Klavier und Orchester KV175
(17歳 1773年12月 ザルツブルグで作曲)
Allegro、Andante ma un poco adagio、Allegro

第3次イタリア旅行から帰った後のザルツブルグ時代のモーツァルトは、充実した生産能力を維持し続けていた。未完の曲や疑わしい作品、日付不明のものなどを含めて、彼は7曲のシンフォニー、4曲のディベルティメント、6曲の弦楽四重奏曲、ピアノ用の変奏曲、ピアノ用の8曲のメヌエツト、オーケストラ用の16曲のメヌエツト、ミサ曲1曲、などがあり、そしてこのピアノ協奏曲KV175が12月に作曲された。この協奏曲はモーツァルトにとって初のオリジナルピアノ協奏曲というばかりでなく、モーツァルト自身の貴重なレパートリーのひとつであった。この曲に愛着も持っていたようで、ミュンヘン旅行やマンハイム＝パリ旅行、そしてウィーン時代にも携えていった。モーツァルトはこの協奏曲によってはじめて、ピアノ協奏曲作家としての道を歩みはじめ、かつ、みずからの演奏家としての曲目を確保しはじめたのであった。